プロポーザルコンペから約4年。無事に図書館とその周辺工事が完成を迎えることができました。市民の方々も巻き込んで関係者が一丸となって作った”那須塩原市図書館 みるる”が名誉ある賞を頂き大変光栄です。
設計から工事までの4年間、本当に多くの人が関わり、話合い、意見を交わして進めてきました。市民の皆さん、市役所の方々、アドバイザーの方々、施工者、設計者、その他にも携わってくれた多くの方々。それぞれがより良い建物になるようにと考え、時には意見がぶつかりながらも、方向性を調整しながら進めてきました。多くの課題に立ち向かいながらも、誰一人として諦めずに一緒に走り続けた結果、この難しい建築を何とか完成まで漕ぎ着けられました。
これからは、市民の皆さんや”みるる”を支えてくださる司書さんたちにバトンを受け取ってもらい、賑やかに使って、学んで、街を育てていってほしいと思います。

那須塩原市図書館 みるる　関係者一同

図書館が街全体の発展に寄与する。このまだ見ぬ新しい図書館像は、「新しいものや新しいことが、持続的に、自生してきたり、湧いてきたりするような場所になるのではないだろうか」。つまり、図書館での利用者の振る舞い自体が周りの人々の心を動かすコンテンツとなり、持続し、街に派生し、循環していくイメージです。この着想は、今も来訪者が絶えない那須の“森”で、木漏れ日の下、風や鳥たちのさえずりに包まれ、那須のはっきりとした四季の移ろいの中に身をおいた時に、その環境や事象の機微の移ろいを五感で感じ「心を動かされる連鎖」を楽しんだ体験から得たアイディアです。利用者個々人の振る舞いの連鎖によって、街を変えていくという大きな動きを呼び起こそうとする試みです。

図書館と駅前広場：シェルターが一体性をもった駅前空間

街に”見せる”図書館

那須塩原市では、モータリゼーションの進展や郊外大型店出店の影響による、無秩序な拡散型都市構造が課題となっています。中心市街地の黒磯地区では、駅周辺を中心拠点区域として、駅前広場を含む図書館整備の計画を制定し、プロポーザルコンペによって設計者を決定しました。また、市主導のアートプロジェクト「アート 369 プロジェクト」との連携を図り、市民の文化力、地域の活力の創出を目指しました。

一体的な駅周辺デザインにより、街のシンボルを作り出しました。広場では市民イベントが開催され、館には内部を横断する市民の日常動線を通すことで、内外の賑わいがつながることを意図しています。新しい街の顔となる駅前空間に対し、図書館をより開かれた場所としてデザインしました。内部の活動を積極的に”見せる”ことを重視しています。街に対して八の字に開く書架に市民活動や展示が表れ、通りすがりの人々に”見せる”図書館を作り出しました。通りからは大きくセットバックし、開放的な縁側スペースを街に提供することによって、駅前広場と一体的な日常の憩いの風景を作り出しています。図書館が発信する学びのきっかけのメッセージを来館者のみならず市民の人々に受け取ってほしいと考えています。

街に開いて配置された本棚．使われ方が替わるたびに変化するファサード

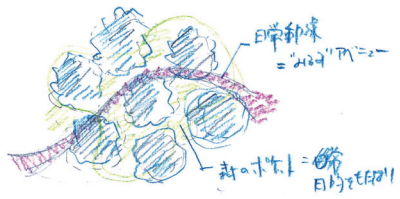
外部の庇まで連続したリーフライン天井は、街に対しても豊かな外部空間を提供している。

マルチモーダルな機微に包まれる ” ことばの森 ”

来館者が学びや気づきを得て心動かす機微に包まれる建築であれば、その振る舞いが周りの人々の心を動かしていく。また、図書館から起こるそのような振る舞いが街に派生し変化を起こしていく。私たちはこれらを実現するために、ハードとソフトの両面に関わり、多岐に渡る“まちデザイン”を行いました。
同時に設計を行った駅前空間では、図書館も含めた一体的な街の玄関口として街のシンボルとなるような空間を作り出しました。駅前広場からは図書館を通り抜けるアーバントレイルをつくり、市民の日常動線を図書館内に引き込んでいます。
新しい図書館は、木立の樹冠の下端を模したリーフラインが多様な居場所を生み出し、放射状の本棚が、活動が重なり合う風景を作り出しています。館全体が、那須の”森“の様に、利用者に多様な機微を創発し、マルチモーダルに刺激を受けとる環境を作り出しました。建築的には、3 つの操作を行っています。

多様な機微の創出を生み出す 3 つの操作

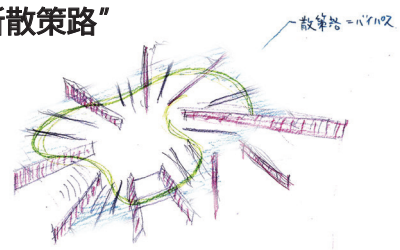
1 様々な活動や利用者を繋ぎ合わせる “みるる Ave.”“森のポケット”



みるる Ave.
図書館以外にもホールやカフェ、ギャラリーや行政窓口などの用途が入っているため、1 階には多目的な用途を集め、館内を通り抜けられる“みるる Ave.”という日常の通り道を通し、開放しています。その動線に絡めていくつもの”森のポケット”を点在させることで、市民の日常が新しい気づきと交わります。そこで見つけた学びのきっかけから 2 階の図書スペースに上がって知識を深めていく、という構成です。

森のポケット
”森のポケット”は木立の中でパッと空が抜けて光が降り注ぐような吹抜けの空間です。ここには明確な用途を与えず、市民活動や展示など様々な使われ方を促し、その様子は通りや吹抜けを通して館内で感じられます。また、ガラスを多用したファサードにすることで、内部の展示や活動を積極的に街に見せて、人々が館に立ち寄る機会をできる限り増やすことを意図しました。

2 放射状本棚が作り出す “領域横断散策路”

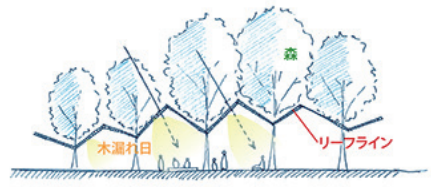


放射状本棚による新しい空間構成
館全体は”放射状本棚”によって構成されています。1 階では空間を緩やかに区切る本棚が、木立の間から見通すように視線が抜けて活動の様子が重なり合う風景を作り出しています。2 階では、放射状の本棚を十進分類法の分類に置き換え、中心からの検索性と分類間を横断する散策性を合わせ持つ独自の書架空間を作り出しました。

十進分類法による一般的なゾーニング　放射状による図書分類ゾーニング　放射状本棚と各領域を横断する散策路　私たちが提案する図書館のかたち

変化を街に伝える変化するファサード
放射状本棚には、本に限らずアート、アフォリズムなど様々な市民活動が表出し、同時に、通り抜け、ベンチといった様々な体験が混在しています。この書架を八の字に配置し、街に開くことで、変化する棚面を街に見せる”変化するファサード”として構成しました。

3 様々な活動を包み込む “木立のリーフライン”



木立のリーフライン
森の木立が生み出す空間が大小様々で、降り注ぐ木漏れ日も天気によって変化するように、私たちは、館全体を森の木立の下葉を表した”多面体のルーバー天井”で包み込み、木漏れ日が降り注ぐ大小様々な空間を作り出しました。

高低差が生み出す様々な居場所
天井が高く抜けた場所には人々が集まる賑やかな居場所が生まれ、天井が低く包まれた場所は、静かで落ち着く籠る居場所が生まれています。多面体のおおらかな高低差の操作により、様々な居場所がひとつながりとなる書架空間を構成しています。

木漏れ日が操作する様々な居場所
ルーバーを介して 1 階まで降り注ぐ木漏れ日は多様な光の環境を生み出し、日々異なる風景を見せています。天井の高い大空間や森のポケットに積極的に陽を差し込み、明るさ・賑やかさを構成しています。

自然光が降り注ぐ”森のポケット”．用途を定めないこの空間は、市民活動や展示、企画展などが入れ替わりながら展開されていく

1 階”みるる AVE.”を歩くと”放射状本棚”によって”森のポケット”やカフェ、ニュースエリアなどが緩やかに繋がっている。

木立の下葉を模したルーバー状の天井”リーフライン”．多面体の高低は緩やかに区切られた大小の居場所を作り出している。